

已上

卯月九日

瀧澤

河内屋

茂兵衛様

尚々 去年の冬直段御申越被成候 冠字考 同統貂
和訓栞 三編揃もほしく候へとも 何分代料一度ニ
てハ 炭ミ候間 この分ハ来年の事ニ可致候 夫迄
下直之本御心かけ可被下候

二五 〔天保四年〕五月六日

〔紙背〕

四月廿八日早便御返事

瀧澤

尚々 丁子や^二之御状 無人ニは御座候得とも 早
速御届申候 此段御承知可被下候

四月廿八日出早便御状今日昼後着 忝致拝見候 先以

薄暑之節 弥御揃御安全被成御起居珍重奉存候 随而
拙方相替事無御座候 御休意可被下候 然ハ四月九日
是^レ差出し候書状を以 俠客傳三集四集引つゝき出来
之趣 御案内申入候処 御承知被成厚く御申越し之趣
致承知候 右ニ付三集潤筆残り 金五兩三分ト五匁二
分五厘 外ニ四集潤筆内金拾兩被遣可被下候よしニて
今般金子貳拾兩丁子や^二御下し被成候よし 御紙上之
趣 忝承知致候 然ル処三集殘金さし引勘定 右五兩
三分五匁二分五厘ハ 丁平殿^三出立前持參被致 慥ニ請
取申候間 丁平殿^二此度被遣候金子ハ 同人方^二引取
可被申候 尚又四集潤筆内金も 美少年錄四集潤筆内
金拾兩 先比丁子や殿^レ請取置候処 俠客傳三集四集
引つゝき綴り上候間 美少年錄ハ其次ニ相成候 左候
へハ 右美少年錄四集内金をふり替候ても不苦候間
当時差急キ請取候ニも不及ト存候得とも 何分丁平殿^三
旅行留守之事ニ付 丁子や留守居和介殿^レ金子着候節
右拾兩被差越候ハ、預り置候て 丁平殿^二帰府之節及相
談いづれとも可致候条 此段御承知可被下候

一 俠客傳三集ハ 四月上旬不殘書をハリ 筆工も五の巻迄不殘出来申候 然ル処画工国貞々今以さし画壺丁も出来参り不申候故 先により差支ニ可相成哉と 甚心配いたし罷在候得とも 何分丁平殿旅行ニ付 画工之様子わかりかね候 丁子やには画工へさいそく無由断いたし候様 折く申遣し候事ニ御座候

一 老拙四月中旬少々ものあたりいたし 今以全快不致候間 いまた俠客傳四集ニは取かゝり不申候 その已前つるや泉市へ合巻多さうし甘丁ツ、つゝり立遣し可申かたくやくそくいたし置候処 右不快故それも今に出来不申 追々暑氣へ赴候間 一日もはやく取かゝり申度 心のミいらち候へとも いまた机にかゝり候氣力無之候 此節しらかゆのミ少し被下候 乍然はじめ兩三日打臥候のミにて 始終ふせりいたし不申候得とも 氣分引立不申 甚こまり申候 乍然此一兩日ハよほとよろしく御座候 此分ニ候ハ、 追々全快可致候間 御安意可被下候

一 丁平殿いまた御地に着無之よし 致承知候 名古やニ

用事有之 それいせ参宮等被致候故 御地には五月節句前後ならてハ 着被致ましきよし かねて被申候キ 大かた此節ハ 着被致候半と存候 御地着被致候ハ、 宜く御傳可被下候 丁平殿御家内いづれも御かへりなき様子ニ及承候間 此段も御つたへ可被下候 一 先便注文之本御面倒御たのミ申候処 承知のよし致承知候 右之外ニ

一 華嚴經

直段何ほといたし候哉 あまり高直之品ニ無之候ハ、船つみの節御たのミ申度候

一 永亨記 写本也

これハ俠客傳ニ入用ニ御座候 江戸ニてかり出し可申友人方尋候処 手ニ入かね候 うつしよろしき写本御座候ハ、 買取申度候 宜キ本御座候ハ、 是ハ丁平殿歸府の節 御渡し可被下候 少しのもの故 荷物之内へ入持参被致候へハ 弥都合よろしく御座候 右無御失念奉願候 先ハ右御返事迄早々如此御座候

恐惶謹言

五月六日

瀧澤篁民

河内や

茂兵衛様

御返事

二六 「天保四年」五月十一日

一筆致啓上候 追日赴薄暑候処 御地御揃御安全被
成御消光珍重奉存候 随而拙方相替義無之候 御休意
可被下候 然ハ先便早状御返事得御意候節 奇応丸御
注文之御返事致候処 右ハ間違ニて御地河内や太介殿
へ申来り候事ニ御座候 其節老拙不快ニて罷在候故
右書状名前見ちかへ甚麓忽之御返事いたし氣之毒ニ奉
存候 依之右藥ハ今便河内や太介殿に差出し候間 此
段御承知可被下候 此間違御心得なく候故 不審ニ思
召候半と萬々致遠察候 依之わさく如此御座候
一俠客伝三集さし画 本所国貞子方へ今に一枚も出来不

七二

参候間 甚心配いたし候 尤丁子やへも度々無由断致
催促候得とも いつもおなし口上ニて出来かね 甚こ
まり入候よしニ御座候 一体かの仁何か氣に障り候ハ
、一年も二年も引すり候事 折々有之候故 此度も
左様之事ニハ無之哉と存候事ニ御座候 平兵衛殿在宿
ニ候ハ、又相談も致し方可有之候得とも 何分ニも
旅行中の事ニて致し方なく候 もし丁平殿帰府之比迄
も右さし画出来不申存ハ、相談いたしとり戻し 外
画工ニかゝせ候様ニも可致候 此段丁平殿着被致候ハ
、御咄し被成可被下候 老拙不快追々快方ニ候へと
も 久しく時候不揃ニて五月七日へ打つゝき甚冷氣ニ
御座候故 氣分引立かねこまり申候 乍去食事等ハ追
々平生体ニ成候間 御安意可被下候 右可得御意 態
と如此御座候 恐惶謹言

五月十一日

篁民

河内や

茂兵衛様

尚々 丁平殿着被致候ハ、宜く御傳可被下候 御同